

万葉論

2章 第二卷

歴史の真実は万葉にあり

相聞

万葉集第二巻は相聞と挽歌で編集されている。相聞は仁徳天皇の皇后の歌で始まる。

難波高津宮の皇の御代、皇后の歌

磐姫皇后、天皇を思ひたてまつる御作歌四首

85 君が行き 日長くなりぬ 山たづね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ
右一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載す。

わが君のお出まはもはや日数長くなりました。山にお迎えに行こうかしら。それともここで待ちこがれて
いようかしら。
(日本古典文学大系萬葉集頭注)

題詞は、磐姫皇后、天皇を思ひたてまつりて作った歌と書くので、皇后になってからの歌であろうか。だが、皇后となる前の歌であるとも考えられる。歌は一途な女心の歌である。

86 かくばかり 戀ひつつあらずは 高山の 磐根し枕きて 死なましものを

こんなにも心配していないで、香具山の岩を枕にして死んでしまえばよかったわ。

「高山」とは中大兄の三山の歌、13番歌でも歌われている天の香具山である。頭注は「高い山の岩を枕に死んでしまったらよかったものを」と「高山」を普通名詞として、高い山と訓んでいるが、この「高山」は中大兄の歌の「高山」と同じと考えるべきである。「高山」といえば九州天皇家においては、倭國の名山、天の香具山である。皇后は誰でも知っている倭(やまと)の國の象徴である天の香具山を枕にして死んでしまえば良かったわ、と詠った。

仁徳皇后の作歌場所は明確ではない。高山を詠んでいるので、九州天皇家の天の香具山、つまり香春一ノ岳の近くであると考えるのが自然であろう。だが、仁徳天皇の宮は、題詞にあるように、「難波高津宮」である。仁徳も皇后もこの宮にいたと考えるのもまた自然である。皇后はこの難波の宮にいて、倭(やまと)の國に行った仁徳天皇を思って歌った、と考えることもできる。高山は倭(やまと)の象徴である。

皇后の歌詞で、「山たづね」の意がよくわからないが、この「山」も「高山」ではないだろうか。九州天皇家で「山」と言えば、畝傍の山、倭三山である。皇后が歌った「山」は「高山」、天の香具山であると解すれば、85番歌と86番歌は繋がる。

仁徳天皇は難波の高津宮から倭(やまと)の國に向かった。出かけてからずいぶん日にちが経っている。皇后は心配でたまらない。こんなに心配するのだったら、高山まで迎えにいこうかしら。そして高山の岩を枕にして死んでしまったほうがよかったかもしれないわ。

87 ありつつも 君をば待たむ 打ち靡く わが黒髪に 霜の置くまでに
このまま君を待っていよう。私の黒髪に夜、霜が降りるまで。

88 秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 何処邊への方に わが戀ひ止まむ
秋の田の稲穂の上に立ちこめている霧がいつか消えていくように私の心配もやむだろうか。

或る本の歌に曰はく

89 居明かして 君をば待たむ ぬばたまの わが黒髪に 霜はふれども
右一首、古歌集の中に出づ。
一睡もしないで君を待っていよう。私の黒髪に霜が降りているけれども

難波高津宮の仁徳天皇の歌

仁徳天皇の歌が古事記にある。だが、この歌は、皇后を思つての歌ではない。

是(ここ)に天皇、其の黒日売(くろひめ)を恋ひたまひて、大后を欺(あざむ)きて、のりたまひしく、「淡路島を見むと欲(おも)ふ」とのりたまひて幸行(い)でましし時、淡路島に坐して、遙(はろぼろ)に望(みさ)けて歌曰(うた)ひたまひしく、

おしてるや 難波(なにわ)の崎よ 出で立ちて 我が國見れば 淡(あわ)島
自凝(おのごろ)島 檳榔(あじまさ)の島も見ゆ 放(さけ)つ島見ゆ

とうたいたまひき。乃ちその島より伝ひて、吉備國に幸行(い)でましき

(古事記下巻 仁徳天皇)

朝日に輝く難波の岬よ。ここに出で立ち、我が國を見れば、淡島、自凝島、檳榔の島が見える。放つ島も見える。

仁徳天皇の歌の舞台は大阪難波ではない。國生みの舞台、小倉北区と彦島である。



淡路島とは九州天皇家の淡路島、吉備國とは九州天皇家の吉備國、難波とは九州天皇家の難波である。「放つ島」とはその名の通り「裂けた島」である。その嶋は、仁徳の時代においても、現在においても、変わりなく存在する。本土から「引き裂かれた」嶋である。

九州天皇家の淡路島とは北九州市若松区である。仁徳天皇が坐して歌った場所、「難波の崎」とは「高塔山公園」である。ここに九州天皇家の宮が存在した。仁徳が皇后に「淡路島へ行く」と云ったのは、淡路島の宮へ行くという意味である。皇后には宮に出かけるという仁徳を咎める理由はない。気をつけて行ってらっしゃいと送り出したことであろう。ところが、仁徳には別の意図があった。

難波の崎から関門海峡に浮かぶ島を順々に見て最後に見える島が「放つ島」だった。この島はその名の通り、放(さけ)た島である。それは下関市・彦島である。九州天皇家の「吉備國」が「放つ島」に存在した。仁徳天皇は、「難波の崎(高塔山公園)」から船で「淡島」へ渡り、次に「自凝島」へ渡り、次に「檳榔の島」へ渡り、最後に「放つ島」に渡った。そこに「吉備國」があり、黒日売が帰っていたのである。

この九州天皇家の吉備國は、神武が東征に出発した吉備國である。神武は彦島・吉備から船で東征に向かい、若松区の沖で「浪が速い」と云った。それが訛って「難波」となった。仁徳の「難波高津宮」はその難波、つまり関門海峡に面した宮だった。

「淡島」は伊邪那岐命、伊邪那美命が國生みした最初の島である。「自凝島」も伊邪那岐命、伊邪那美命が國生みした島である。九州天皇家の始祖たちの説話舞台は関門海峡であった。仁徳天皇は九州天皇家の天皇である。当然のことながら、仁徳の歌はこの伊邪那岐命、伊邪那美命の國生みの舞台で歌われている。

仁徳の高津宮は九州天皇家の難波、関門海峡に面した小倉北区の湊に存在した。現在の小倉城付近であろう。

近江大津宮の天皇の御代、鏡王女の歌

天皇、鏡王女に賜ふ御歌一首

91 妹が家も 継ぎて見ましを 大和なる 大島の嶺に 家あらましを

近江大津宮の天皇とは九州天皇家の天皇である。淡海とも云われた九州天皇家の近江は小倉南区曾根である。滋賀県大津の錦織遺跡は九州天皇家とは無縁である。九州天皇家の近江大津宮は小倉南区長野に存在した。景行紀は小倉南区に於ける土蜘蛛との戦記である。土蜘蛛との戦いに勝利した景行は小倉南区長野に都を作った。近江大津はすでに景行の代に宮を構えた九州天皇家の都であった。景行の息子の成務もこの宮で行政改革を進めた。

近江大津は九州天皇家歴代の宮が存在した都であった。万葉集が「近江大津宮」の天皇と題詞に書いた天皇もここにいた。「近江天皇」と呼ばれた天皇である。

近江大津は現在の竹馬橋の近くに存在したと史料に記録に残る。小倉南区曾根の宮にいた近江天皇の歌は誘いである。私の家が山跡(原文)の大島の山にあればいつも見ることができるだろうに。

天皇は近江大津宮でこの歌を詠んだ。「大和」は原文では「山跡」である。「山跡」は万葉一番歌の雄略の歌の「山跡」を踏襲している。雄略歌の「山跡」とは神武建国の倭(やまと)である。近江天皇は、今、近江大津にいる。ところが、鏡王女は山跡(やまと)にいる。

倭の大島に嶺に私の家があるならばいつでもあなたを見ることができるのに。

この歌は誘いである。私がいる近江大津に移っておいでという誘いである。その誘いに鏡王女が応えて歌う。

鏡王女、和へ奉る御歌一首

92 秋山の 樹の下隠る 逝く水の われこそ益さめ 御思よりは

秋山の樹の下を流れる水の量が増すように、私は天皇が思ってくださいるより一層強く思っております。でもその思いを心の外に出すわけにはいきません。ひっそりと流れる水のように私は近江に移らずにここ倭(やまと)におります。

鏡王女は天皇の誘いをそっと断った。鏡王女は額田王の母と日本書紀は書いている。二人には深いつながりがあったと思われる。近江天皇が埋葬された陵の名前は「鏡山」と云う。額田王は、挽歌で、近江天皇が鏡の山に埋葬されたと歌った。鏡の山とは香春町の鏡山神社である。鏡王女と名前が共通するように、鏡王女はその地にゆかりのある王女だったのあろうか。近江大津宮の天皇は死後、鏡王女の故郷で眠ったことになる。

内大臣藤原卿、鏡王女を娉ふ時、鏡王女の内大臣に贈る歌一首

93 玉くしげ 覆ふを安み 開けて行かば 君が名はあれど わが名し惜しも

内大臣藤原卿とは藤原鎌足と云われる。藤原鎌足は九州天皇家の重臣ではない。日本國天皇家の重臣である。645年、32歳の時、日本國天皇家の王を助けて蘇我入鹿を暗殺する。その功績で647年、34歳で大錦冠を授与される。654年、41歳で大紫冠に昇格する。藤原鎌足は日本國天皇天智の右腕であった。鎌足の没年は669年、56歳で亡くなったと伝わる。この時の九州天皇家の天皇は近江天皇である。この歌が近江天皇の代に編纂されているのはそれ故である。

歌は「娉ふ」歌、つまり求婚の歌である。作歌時期は近江天皇の御代であるから求婚も近江天皇の代である。鎌足はすでに晩年である。この歌を詠んだ鏡王女は幸福感に満ちている。

夜が明けないうちに帰るのが普通なのにあなたは夜が明けてから帰る。当然人々の噂になるでしょう。あなたの名前が知れるのは構わないけれど私の名前が知れるのは口惜しいわ。

このように、一見、怒って詠っているようであるが、その実、誇らしく思っているとも見える。夫となる鎌足は乙巳の変で大殊勲をあげ、34歳の若さで大錦冠を授与された日本國天皇家の重臣である。当代ナンバーワンの男性から求婚されて気分が悪かろうはずがない。

見て、私は鎌足から求婚されたのよ。夜が明けてから帰っていくから皆さん、分かっているでしょう。その人よ。

自信と誇りに満ちた歌である。

内大臣藤原卿、鏡王女に報へ贈る歌一首

94 玉くしげ みむろの山の さなかづら 寝ずはつひに ありかつましじ

鎌足が歌を返す。何を口惜しんでおられます。人の噂なんかどうでもいいではないですか。私はあなたと共に寝ないでいることなんか耐えられませんよ。

やがて、669年に鎌足が亡くなる。鏡王女はその14年後の、683年に亡くなっている。亡くなる前に、天武天皇が見舞っている。万葉集第四巻に鏡王女と額田王に歌が並んで載せられている。

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

488 君待つと わが戀ひをれば わが屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く

鏡王女の作る歌一首

489 風をだに 戀ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ

母、鏡王女は娘の孤独感に応じて詠っている。

私には待つ人なんか誰もいませんよ。だから風が吹いてすだれを動かしても私には待っている人がいないのだから何のこともありません。あなたは待つ人は来ないで、秋風だけが吹いて来ると嘆いているけれど、でもあなたには待つ人がいるじゃないの。私にはそんな人は一人もないのよ。あなたにはいつ来ていたかだけの待つ人がいるだけでも幸せと思いなさい。そんなに嘆くことはありませんよ。

額田王が待っている君とは近江天皇である。九州天皇家近江大津の宮の天皇である。作歌時期はいつであろうか。額田王は、初め、近江天皇の実弟、天武と結婚して十市皇女を産んでいる。その後、近江天皇に嫁したことになるが、この歌はその後の歌である。しかし、その近江天皇は私の家にやってくる。鏡王女には額田王の寂しさがよく分かっていたのであろう。母親として娘を慰安しているが、額田王にとって慰安となったであろうか。この歌に現れた鏡王女の寂寥感はどうでしょう。私の家には風さえも訪れませんよ。この時、もはや鎌足は亡くなってずいぶん時が過ぎていたのであろう。

明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

103 わが里に 大雪降り 大原の 古りにしりに 落ちまきは後

藤原夫人、和へ奉る歌一首

104 わが岡の 霜に言ひて 落らしめし 雪の摧けし 其處に散りけむ

藤原夫人とは鎌足の娘、五百重娘と云う。夫人は妃と嬪との間の地位で天皇に侍す、と頭注は書く。天武は692年、壬申の乱の勝利によって、日本國天皇家を倒し、天皇となった。日本國天皇家の重臣、藤原鎌足の娘はこうして天皇天武に仕えたと思われる。天武の妃には九州天皇家出身と日本國天皇家出身の二つの流れがある。

九州天皇家出身の妃とその子ども

十市皇女(653~678)	母・九州天皇家・額田王
高市皇子(654~696)	母・九州天皇家・胸形君徳善の娘、尼子娘
忍壁皇子(?~705)	母・九州天皇家・宍戸臣大麻呂の娘、椒媛娘
磯城皇子(?~?)	母・九州天皇家・宍戸臣大麻呂の娘、椒媛娘
泊瀬部皇女(?~741)	母・九州天皇家・宍戸臣大麻呂の娘、椒媛娘
託基皇女(?~?)	母・九州天皇家・宍戸臣大麻呂の娘、椒媛娘

日本國天皇家出身の妃とその子ども

大来皇女(661~701)	母・日本國天智天皇の皇女、大田皇女
大津皇子(663~686)	母・日本國天智天皇の皇女、大田皇女
草壁皇子(662~689)	母・日本國天智天皇の皇女、鸕野讃良皇女(持統天皇)
長皇子(?~715)	母・日本國天智天皇の皇女、大江皇女
弓削皇子(?~699)	母・日本國天智天皇の皇女、大江皇女
舎人皇子(676~735)	母・日本國天智天皇の皇女、新田部皇女
但馬皇女(?~708)	母・日本國天皇家重臣、藤原鎌足の娘、氷上娘
新田部皇女(?~699)	母・日本國天皇家重臣、藤原鎌足の娘、氷上娘の弟五百重娘
穂積皇子(?~715)	母・日本國天皇家重臣、蘇我赤兄大臣の娘、大薙娘
紀皇女(?~?)	母・日本國天皇家重臣、蘇我赤兄大臣の娘、大薙娘
田形皇女(?~?)	母・日本國天皇家重臣、蘇我赤兄大臣の娘、大薙娘

天武の第一皇子といわれる高市皇子の母は、胸形君徳善の娘、尼子娘である。胸形君徳善とは北九州の豪族宗像氏であろう。壬申の乱で功績が大であった天武の第一子、高市皇子は、北九州の豪族の娘との間に生まれた子どもだった。天武は九州天皇家の王である。最初の子どもが北九州の豪族宗像氏の娘との間にできたことは不思議ではない。

しかし、但馬皇女と穂積皇子は全く異質な存在である。但馬皇女の母は藤原鎌足の娘、氷上娘といわれる。穂積皇子の母は蘇我赤兄の娘、大薙娘といわれる。この二人は日本國天皇家の重臣の娘である。天武は壬申の乱に勝利して日本國天皇家を併合した。その後、日本國天皇家の重臣の娘を妃としたのであろうか。或い

は藤原氏も蘇我氏も新しい支配者の下に自分の娘を妃として入れたのかもしれない。

天武は国家を建設していく際、天皇親政を敷いた。この統治形態は九州天皇家の伝統的な天皇中心の統治形態である。しかし、その頃、日本國では既に左大臣、右大臣を頂点とする優れた国家行政機構が完成していた。その事情は壬申の乱、先が読めない不安な時、天武が高市皇子に語った言葉に表れている。

既にして天皇、高市皇子に謂りて曰はく、「其れ近江朝には、左右大臣、及び智謀き群臣、共に議を定む。今朕、ともに事を計る者無し。唯幼少き孺子有るのみなり。奈之何かせむ」とのたまふ。

皇子、臂を攘りて剣を案りて奏言さく、「近江の群臣、多なりと雖も、何ぞ敢へて天皇の靈に逆はむや。天皇独りのみましますと雖も、臣高市、神祇の靈に頼り、天皇の命を請けて、諸將を引率て征討はむ。豈距くこと有らむや」とまうす。(日本書紀・天武上)

日本國天皇家は大化の改新以来、近代的な国家組織を完備してきた。その中心に居たのが藤原氏である。天武は日本國天皇家の優れた行政官僚の力を無視するわけにはいかなかったと思える。

藤原宮に天の下知らしめし高天原廣野姫天皇の代

大津皇子、竊(ひそ)かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首

105 わが背子を 大和へ遣ると さ夜深けて 暁(あかとき)露に わが立ち濡れし

原文 吾勢祐乎 倭邊遣登 佐夜深而 鶏鳴露に 吾立所霑之

「倭」とは九州天皇家の倭國、香春町・田川市である。伊勢は九州天皇家の伊勢、行橋市である。行橋市の神田町から田川市の魚町までの道のりは19.12kmである。この間、徒歩で約3時間49分。題詞に書かれているように、倭(田川市)を早朝発って伊勢(行橋市)に到着し、暁に伊勢を発ち、早朝、倭に戻ることは可能であろう。「下りて上り」とはこの行程をいったである。



大津皇子は天武天皇が亡くなってから20余日後、686年10月2日に謀反を企てたことが発覚、翌日処刑された。24歳であった。

106 二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が ひとり越ゆらむ

大伯皇女の大津皇子への別れの歌である。紅葉の秋山を越えて倭(田川)に向かう弟を、早朝の露に濡れて見送っている。伊勢(行橋市)と倭(香春町)の間には大坂山がそびえる。秋山とはその山であろうか。やがて季節は冬。大津皇子にとっても冬の時代となると歌った大伯皇女の予測通り、大津皇子は謀られて死に追いやられた。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

107 あしひきの 山のしづくに 妹待つと われ立ち濡れぬ 山のしづくに

石川郎女、和へ奉る歌一首

108 吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに 成らましものを

大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りまし御歌一首

109 大船の 津守の占に 告らむとは まさしに知りて わが二人宿し

日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首

110 大名兒を 彼方野邊に 刈る草の 束の間も われ忘れめや

石川女郎と大津皇子、石川女郎と草壁皇子との歌が並んで編集されている。大津皇子と草壁皇子は母が姉妹で従兄弟である。二人は共に石川女郎に求愛しているが、「二人宿(ね)し」は大津皇子である。草壁皇子は「束の間も忘れめや」と恋い焦がれているが、草壁の歌への石川女郎の返歌は掲載されていない。だが、もはや、勝敗は明らかである。果たして、持統はこれらの歌を知っていたのであろうか。当然知っていたと思われるが、持統の悩みは深かったことであろう。

何ということだ。かつて夫、天武は実兄と額田王を争った。天武は額田王との間に十市皇女をなしたが近江天皇は額田王を妻とした。奇しき因縁か、わが子、草壁は大津皇子と石川女郎を争っている。しかし、勝利したのは大津皇子だ。この恋争いが象徴するように、二人はこれからも何事につけ争うだろう。そして勝者はどちらか。きっと大津皇子だろう。大津がわが子、草壁の未来に暗い影を落としている。

吉野の宮に幸しし時、弓削皇子、額田王に贈與る歌一首

111 古に 戀ふる鳥かも 弓絃葉の 御井の上より 鳴き渡り行く

吉野の宮とは九州天皇家の吉野の宮である。持統は度々行幸している。この宮は人麿が、花の宮、水の宮と歌ったことでよく知られている。この歌は持統がまだ九州に居たときの歌である。持統はまだ即位していない。今は天武の代である。従って「古」とは天武の代ではなく、近江天皇の代であろう。近江天皇は吉野にいた。そして、額田王は近江天皇の妃であった。

額田王、和へ奉る歌一首

112 古に 戀ふらむ 鳥は霍公鳥 けだしや鳴きし わが念へる如

返歌を送った額田王は倭京にいた。「倭京より奉り入る」と註がある。倭京とは九州天皇家の都、香春町、田川市である。

近江天皇の代を恋慕って鳴いている鳥はホトギスですよ。恐らく、私が近江天皇の代を思っているように、ホトギスも鳴いたのでしょう。

吉野より蘿生せる松の柯を折り取りて遣はす時、額田王の奉り入るる歌一首

113 み吉野の 玉松が枝は 愛しきかも 君が御言を 持ちて通はく

弓削皇子が額田王に贈ったのは「さがりごけ」のついた松の枝である。み吉野の美しい松の枝は愛しいものである。君の言葉を持って通ってくる。松が持ってきた言葉とは何か。「あなたを待つ」ということであろうか。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

114 秋の田の 穂向の寄れる こと寄りに 君に寄りなな 事痛かりとも

秋の田の稲穂が同じように垂れている。そのように、私もあなたに寄り添いたい。噂がひどかろうとも。

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りまし御歌一首

115 後れ居て 戀ひつつあらずは 追ひ及かむ 道の阿廻に 標結へわが背

あとに残って恋い慕っておらずに、追って追いつきたい。道の曲がり角にはしるべを結っておいてください。あなた。

「近江の滋賀の山寺」は崇福寺(頭注114)といわれる。この歌は「藤原宮に天の下知らしめしし」天皇、つまり持統天皇の代の歌である。持統の代は九州時代と近畿時代に分かれる。

歌はどちらの歌と判断すればよいのか。「近江の志賀」とは九州天皇家の伝統の語法である。だが、この歌には逆巻く白波はない。夕方に押し寄せる波もなければ、千鳥の鳴き声もない。ただ山寺があるだけである。しかし、近江の志賀とは九州天皇家の志賀であろう。

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首

119 吉野川 逝く瀬の早み しましくも 淀むことなく ありこせぬかも

120 吾妹兒に 戀ひつつあらずは 秋萩の 咲くきて散りぬる 花にあらましを

121 夕さらば 潮満ち来なむ 住吉の 浅鹿の浦に 玉藻刈りてな

122 大船の 泊つる泊りの たゆたひに 物思ひ瘦せぬ 人の兒ゆえに

吉野川も九州天皇家における伝統的な語法である。万葉集に「吉野川」と歌われた川は竹馬川である。「夕さらば 潮満ち来なむ」という情景は小倉南区の曾根の海である。夕方に曾根の干潟に波が押し寄せて干潟は淡海となる。

藤原宮に天の下知らしめしし高天原廣野姫天皇の代

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り来る時の歌 二首

131 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 瀧なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 瀧はなくとも 鯨魚取り 海辺を指して 柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振る 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄り 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈毎に 萬たび かへり見すれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎へて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山

石見の海、角の浦廻には良い港がないと人は見る。良い干潟がないと人は見る。ままよ。それでいいではないか。良い港がなくても良い。良い干潟がなくても良い。捕鯨の船が海の向こうをめざして出航する柔田津の港の荒々しい磯に生えているあおい若布、沖の若布に朝に鳥が羽ばたき、風が寄せてくるように、夕方、鳥が羽ばたき、波が寄せてくるように、波とともに、ああ寄せ、こう寄せる若布のように寄り添って寝た妻を露霜が降りるように置いて来た。この道の曲がり角ごとに何度も何度も振り返り見るけれど、もう里は遠くなってしまった。いよいよ高い山も越えてきた。妻は夏草が萎れるように思い歎いて私を偲んでいるであろう。妻の家の門をもう一度見たい。靡け、この山。

京は太宰府

人麿が石見國の妻と別れて「上り来る」時に詠った歌である。「上り来る」とは京へ上るという意味である。「京」とはどこか。通常理解では奈良である。だが人麿にとっての「京」は太宰府である。人麿は天武三年に石見の國守に任ぜられている(石見國風土記)。この歌は持統の代に収録されているので、作歌時期は天武の死後であろう。太宰府への上京は持統の命令かもしれない。この歌は京に上ってまたすぐ帰ってくる雰囲気のある歌ではない。上京したら帰って来ることができるかどうか分からない別れ歌のような歌である。

石見の妻は依羅娘子

石見國とは九州天皇家の石見國である。石見國は人麿と妻が住んでいた土地である。人麿が京に上る時、「妹が門見む靡けこの山」と別離を詠った妻とは依羅娘子である。

依羅娘子は第二夫人ではなく第一夫人である。第二夫人というべきは太宰府に上って後の「輕の路の妻」である。「輕の里」に住んでいた妻は人麿より早く亡くなっている。万葉第二卷挽歌・207番歌が「輕の里の妻」への挽歌である。

依羅娘子は人麿の上京後も石見國に住んでいた。当時の婚姻制度は通い婚である。夫が上京しようとも妻が石見國に残っていたのは当然である。妻の名前は「依羅」と書いている。読みは「ヨサミ」である。

北九州市小倉南区朽網東1丁目18番地に「貴船神社」がある。その神社の境内に人麿の歌碑がある。



(<http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub252.html>)

2674 朽網山 夕居る雲の 薄れ行かば 我は恋ひむな 君が目を欲り

朽網山。夕方にかかっているその雲が薄れて行ったなら、私は恋しく思うであろう。あなたの目が見たくて

この「朽網」は「クタミ」である。妻の名前は「ヨサミ」、山の名前は「クタミ」、國の名前は「イワミ」と「ミ」が共通している。「ミ」とは「海」であろう。人麿の妻も「海」の意味を持つ「ヨサミ」の地の出身だったことを示している。「朽網山」とは貫山である。貫山にかかっている夕雲が薄れ山がきれいに見えるようになれば、私はあなたの澄んだ目が見たくなる。人麿青春の歌であろう。若き人麿は苺田で恋をして苺田で妻を娶った。苺田こそが人麿の故郷であった。上京路は陸路である。石見國から陸路で太宰府まで上っていったのである。

石見の海

「石見(いわみ)」とは本来の意味は「岩の海(いわのうみ)」のことである。「岩を見る」という意の地名ではない。「石見(岩の海)」という地名から岩の海岸に打ち寄せる荒々しい海を想起することができる。石見の海とは周防灘である。

「いわのうみ」とは「あわのうみ」の対語である。「あわのうみ」とは「淡海(泡の海)」である。「泡の海」とは小倉南区曾根干潟に広がる海である。九州天皇家で「近江」あるいは「淡海」と呼ばれてきた海は静かな穏やかな干潟の海である。

「石見の海」とは朝日に輝き、夕日に照る苺田町の周防灘である。梅原猛氏が「水底の歌」でイメージした「山陰の暗い海」ではない。石見國の東の海は明るい。しかし、妻と別れて京に上る人麿の心は悲しく、暗い。人麿は、周防灘の明るさと、心の暗さを対照して歌っている。



角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと 人こそ見らめ

「石見の國」の「角の浦」には「浦もない」「潟もない」と人は見る。このフレーズは、もうひとつの國、「浦がある國」「潟がある國」を前提にして成り立っている。浦があり、潟があるのは「近江の國(曾根干潟の國)」である。ここには、古代、多くの入り江があり、島があった。

昔、伊弉諾尊、此の國を目づけて曰わく、「日本は浦安の國、細戈の千足る國、磯輪上の秀真國」とのたまひき。
(日本書紀神代)

伊弉諾尊が「浦安」、つまり「港が穏やかである」と称えた國が「近江の國(小倉南区曾根)」である。それにたいして、「石見の國」には良い浦もない。良い干潟もない。岩の多い荒々しい海の國である。でも、それでもいいではないか。なぜなら、ここには「か寄りかく寄り 玉藻なす 寄り寝し妹」がいる。

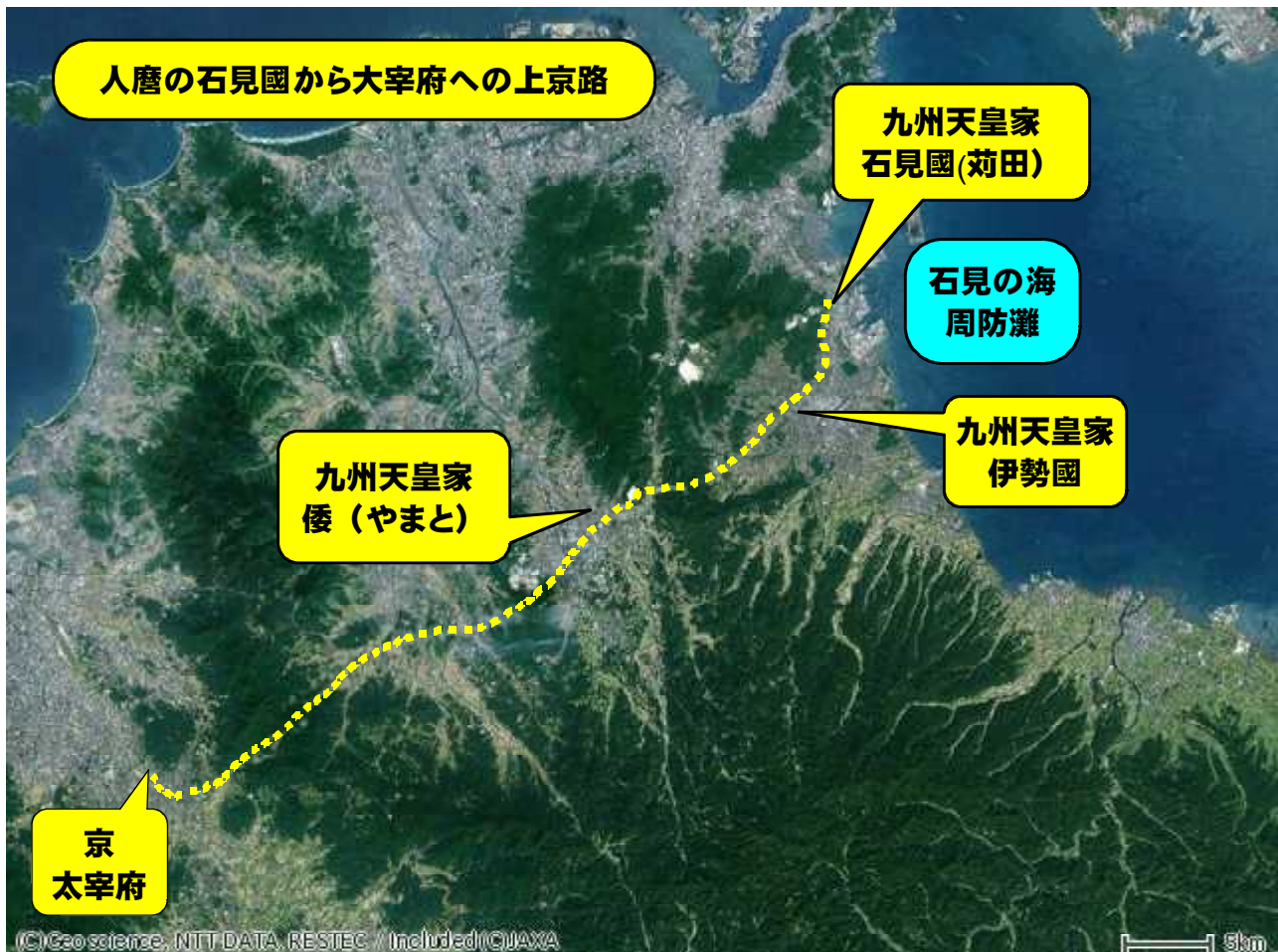
鯨魚取り

「鯨魚取り」と詠っている。この海では捕鯨が盛んであった。行橋市の杵尾漁港には鯨を吊った碑がある。周防灘では鯨が捕れた。「鯨魚取り」とは捕鯨そのものをいう。

石見國から大宰府

人麿は九州天皇家の石見の國で新妻と暮らしていた。人麿が結婚生活を送っていた石見の國とは京都郡・荻田町である。人麿は荻田で生まれ、荻田で育ち、妻を娶った。荻田が人麿の故郷であった。荻田は人麿が青春時代を送った故郷であった。やがて歴史は激動し人麿の人生も大きく変る。人麿は故郷荻田の新妻に別れを告げて上京することになる。この京とは天武・持統が天下を治めた京、太宰府である。

万葉編者はよほど人麿の別れ歌に共感したのであろう。人麿の妻との別離の歌を三首も載せている。



反歌二首

132 石見のや 高角山の 木の際より わが振る袖を 妹見つらむか
石見にある高角山の木の間から、私が振る袖を妻は見たらろうか。

- 133 小竹の葉は み山もさやに 乱るとも 我れは妹思ふ 別れ来ぬれば
笹の葉は山をざわめかし、乱れて揺れているが、私の心は妻のみ思っている。今別れてきたのだ。

或る本の反歌に日はく

- 134 石見なる 高角山の 木の間ゆも わが袖振るを 妹見けむかも
石見にある高角山の木の間から、私が袖を振っているのを妻は見たらどうか。

- 135 つのさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる 海石にそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉藻は生ふる
玉藻なす 靡き寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し夜は いくだもあらず 這ふ鳶の 別れし来
れば 肝向ふ 心を痛み 思ひつつ かへり見すれど 大船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱ひに 妹が
袖 さやにも見えず 妻ごもる 屋上の山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ
入日さしぬれ 大夫と 思へるわれも 敷袴の 衣の袖は 通して濡れぬ

石見の海の辛崎の海石には深海松が生えている。荒磯には若布が生えている。その若布のように靡き寝た妻を深海松の名前の如く深く想っている。一緒に寝た夜はいくらもなく、這ふ鳶のように別れて来た。心が痛み、妻を想いつつ、振り返って見るけれど、渡の山の黄葉が風に散って、妻が振る袖もはつきり見えず、屋上の山の月が雲の間に隠れて見えないように、妻が見えないことが悔しく、隠れ見えなくなり、ここまで来た。入り日がさしてきて、自分は大夫とおもっているが、それでも袖が涙で濡れてしまったことである。

反歌二首

- 136 青駒が 足掻きを 速み 雲居にそ 妹があたりを 過ぎて来にける
私の乗る青い馬は足が速い。妻のいるところを過ぎて、遙か遠く、ここまで来てしまった。

- 137 秋山に 落つる黄葉 しましくは な散り乱ひそ 妹があたり見む
秋山に落ちた黄葉よ。しばらくは散らないでおくれ。妻のいる処を見たいから。

或る本の歌一首

- 138 石見の海 津の浦をなみ 浦なしと 人こそ見らめ 瀧なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも
よしゑやし 瀧はなくとも 鯨魚取り 海辺を指して 柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻
明け来れば 波こそ来寄れ 夕されば 風こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄り 玉藻なす 靡き我
が寝し 敷袴の 妹が手本を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈ごとに 万たび かへり見
すれど いや遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ はしきやし 我が妻の子が 夏草の 思ひ
萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡けこの山

石見の海、この海には港となる入り江がない。そのような入り江がないと人は見る。干潟がないと人は見る。それでもいいではないか。入り江はなくてもよいではないか。干潟はなくてもよいではないか。鯨を捕る船が海へ出て行く柔田津の荒磯のあおい若布は朝となれば波が寄せて、夕方には風が吹いてその波とともに、あのように寄り添い、このように寄り添う。その若布のように、靡いて寝た袖振る妻を露霜のように置いてきた。京への道が曲がるたび、振り返り、妻をみたが、いや妻の里はずでに遠く、高い山も越えてきた。愛しい妻よ。わが子は夏草が萎れるように悲しんで歎いているであろう。角の里を見たい。靡け。この山。

反歌一首

- 139 石見の海 打歌の山の 木の間より 我が振る袖を 妹見つらむか
石見の海、打歌の山の木の間より、私が振る袖を妻は見たであらうか。

柿本朝臣人麿の妻依羅娘子、人麿と相別るる歌一首

- 140 な思ひと 君は言へども 逢はむ時 何時と知りてか わが戀ひざらむ
あなたは心配するなど言うけれど、今度、いつ逢うことができるのか分からないのでは、私の心配は

尽きません。

第二巻相聞の最後は人麿の妻のこの歌である。天武三年、石見守に任命された人麿は、持統の代に大宰府への上京を命じられた。人麿は荻田町から大宰府へ向かって、紅葉の散りしいた秋山を越える73.7kmの道のりを馬に乗って上京した。

この上京は人麿にとって喜ばしいことであったか、それとも、不吉なことであったのか。妻の歌では、人麿は、「心配するな」と言い残した旅だったようである。その後、何があったかわからないが、人麿は持統の代の末に、讃岐に流され、文武の代に石見國に流された。人麿は、結局、妻と再会することなく死んだ。人麿の妻、依羅娘子への歌は、何かそれを予感させるような、悲しい、今生の別れ歌となった。